

善隣

No.479 通巻746

2017年（平成29年）5月1日発行（毎月1日発行）

2017

5



一般社団法人 **国際善隣協会**



善 隣 目 次 2017年 5 月号

公開講演会記録

- 日中卓球交流の歴史と2020東京五輪 ……………木村興治 2
- これからの医療はどうなる、
医療崩壊のルーツは明治維新……………本田 宏 9
- 翻訳家が語る、
魅力ある中国文学の世界 ……………泉 京鹿 17

読んでみました

- 『毛沢東の対日戦犯裁判 中国共産党の思惑と1562名の日本人』
大澤武司著 ……………伊大知重男 25

出かけてみました

- 〈戦争は人間を悪魔に変える〉検証の旅 ……………渡邊澄子 26

中国ウォッチング……………編・訳 上松玲子 29

陶々俳壇……………馬場由紀子選／鈴木昭治郎 31

協会通信・同好会だより・編集後記…………… 32

2017年 5月の行事予定…………… 33

善 隣 第479号 通巻746号

2017(平成29)年 5月 1日発行

発行所 〒105-0004 東京都港区新橋 1-5-5

一般社団法人 国際善隣協会

TEL 03(3573) 3051

FAX 03(3573) 1783

発行人 矢野一彌

印刷所 (有)ゆにおんプレス

定価 一部400円 年額4,800円

振替 00120-0-145956

国際標準逐次刊行物 ISSN 0386-0345

©禁無断転載

表 紙

日比谷公会堂

表紙裏

上：日比谷公園鶴の噴水

下：日比谷公園野外音楽堂

(撮影：福島靖男)

裏表紙

上：松戸市常盤平の桜並木

下：松戸市常盤平、夜の桜並木

(撮影：福島靖男)

日中卓球交流の歴史と

2020東京五輪

一般財団法人 日本スポーツマンクラブ財団・専務理事 木村興治



戦後の1949年に、アメリカの強い後押しもあって、国際卓球連盟に復帰加盟をした日本卓球協会は52年開催のインド・ボンベイの世界卓球選手権に選手を派遣した。そして、現在と同じ7種目中、3種目に優勝し、世界を驚愕させた。

その後の50年代の日本はそれまで強国であった欧州を破り、世界にその力を示すこととなった。日本の活躍を見ていた中国は卓球が中国人に向けたスポーツとして考えたと思われる。また、後述するように政治を含む国際社会との関係でも卓球は重視されるようになったと考えられる。それがピンポン外交と言われる71年、72年の米中交流、日中国交回復に繋がっていったといえる。

1. 中国卓球の現状

中国卓球は世界で圧倒的に強い。日本は若手選手の成長もあり、中国に近づいているが、トップ選手の総合力では差のあるのが現実である。最新の世界選手権での全7種目の優勝、リオデジャネイロ・オリンピック全4種目の金メダル、これが中国である。オリンピックに、卓球が入ったのは88年のソウル大会から。以来リオ・オリンピックまで8回、金メダルは4種目×8＝32個、中国はその90%、29個を獲得してきた。厳しい競争の中、僅かなトップクラスを目指しながら、到達できなかった中国選手たちは世界の様々な卓球協会に受け入れられ、活躍している。

リオ・オリンピックで日本女子は準決

勝でドイツに敗れたが、2人の強い中国選手がいたからである。（日本は3位決定戦で中国出身選手のいるシンガポールに勝ち銅メダル）

因みに、このドイツの2人は世界選手権には出場できない。2007年に世界トップ選手と大陸チャンピオン計16人による女子ワールド・カップが開催された。中国人選手以外は福原愛と韓国の選手であった。これでは、世界の卓球の健全な発展に障害となると考えた国際卓球連盟は翌年、協会を移動した選手で世界選手権に参加を考える選手については、新協会が届け出をすることを義務づけ、そして、20歳以上の選手は受け付けないことを決めた。

19歳以下の選手の届け出までの年数も

定めた。勿論、選手の権利を考え、国際オープン大会への出場は問題なしとした。オリンピックへの出場資格は国際オリンピック委員会（IOC）の独自規定があり、3年間に上居住と国籍である。日本でも、世界代表、オリンピック代表となった中国からの移籍選手がいた。現在も多くの中国コーチや留学生選手がおり、日本の卓球強化に貢献してくれている。

2. 国際卓球連盟（ITTF）とは

ITTFは1926年イギリスで創立された。会長はケンブリッジ大学生で22歳のアイボ・モンタギュー、その後41年間、会長を続けた。オリンピック種目になるまでは、世界選手権での会場内への参加協会の国旗掲示なし、表彰式での国旗掲揚・国歌吹奏がなかった。

現在もそうだが、ITTFへの加盟は国ではなくその地域を統括している卓球協会である。Great Britain（正式にはもっと長い名称）としてIOCに加盟している我々のいうイギリスは、卓球では、England, Wales, Scotland と3つの島が独立して加盟し、世界選手権に参加している。オセアニアからは24の協会が加盟しており、その数は国際スポーツ連盟

として最大の222の協会（国と地域）となっている。また、加盟協会は世界選手権への参加権利があり、国同士で外交がない協会が主催した場合、選手団の入国に困難が伴うこともあるが、すべて実現している。

2010年のモスクワ大会へのロシアが未承認のコソボ選手団に対して、入国ビザを出さないことから、ITTFはロシアから開催権を取り上げると警告した。開催直前、ロシアはコソボ選手団への特別入国書を発給した。日本での開催時も北朝鮮選手団は毎回入国している。これらの規定は創設者、会長のモンタギューの「選手を第一に考えるべきである」という深い思想からITTFの憲章に反映されてきた。

ITTF発足当初から、卓球ではルーマニア、ハンガリー、チェコスロバキア、ユーゴスラビア等の東ヨーロッパが強かったが、世界で優勝しても生活が苦しかったことから、トップ選手はドイツやフランス、イギリス等のクラブや協会と契約し、少しは恵まれた環境でプレーすることにした。しかし、国籍は変えなかった。世界選手権は、国の代表でなく、協会代表であるから、国籍が異なってもよかった。複数の国の選手の優勝チーム、派遣

された協会の国と異なる国籍を持つ優勝選手への国旗、国歌を使わないことが自然であった。素晴らしいプレーはピアニストやバイオリニストと同じで国と関係ないというのがモンタギューの考えであった。彼からは、60年代の世界選手権で金メダルを授与されている。

83年、東京での世界選手権に招待した彼から、卓球への様々な思いと実践を聞くことができた。オリンピックでのナショナリズムが益々強くなる今日において、国ではなく選手とその競技表現を第一にした彼の哲学を今こそ教訓にすべきとは思っている。

3. 中国の国際卓球連盟（ITTF）の加盟と世界選手権への参加

中国は53年にChinese Table Tennis Association (China) としてITTFに加盟した。国際スポーツ連盟への最初の加盟であった。モンタギュー会長のバックアップもあった。台湾を含まない中国地域を統括する卓球組織としての加盟であった。台湾は加盟していなかった。そして、その年の世界選手権に参加している。引き続き世界選手権に参加。56年には東京での世界選手権にも参加した。日

本政府は台湾との関係から入国ビザの発給に苦慮したが、ITTFの憲章への対応と中国が在中国日本軍人の帰還に努力していることもあり（私の推測）、約30人の選手団を受け入れた。その後も世界選手権に参加したが、強くはなく、メダル獲得もなかった。

58年、中国は台湾問題からIOC活動を絶った。中国にとって世界スポーツとの繋がりを考えると、ITTF内に存在することと卓球競技力の強さを持つことは国家戦略としても、必要であったと思う。その頃、国際試合の経験を持つ広州から香港に行っていた選手とコーチを北京に呼んだ。59年からは2年ごととなった世界選手権、ドイツ大会で香港から来た容国团選手が男子シングルスで優勝した。日本は残り6種目に優勝した。そして、ITTFは61年北京で世界選手権を開催することを決定した。当然のことながら、潜在能力の高い若い選手を選抜し、香港から来たコーチの下に、日本に対抗するための徹底した強化訓練が行われたと考えられる。練習環境も十分ではなく、コンクリートの床での練習もあったと後で聞いた。

4. 北京での世界選手権

61年4月、中国は北京で世界選手権を開催した。私は日本代表に選ばれた。20歳で、初めての外国行きだった。香港でビザを得て、列車で深圳に行き、パスポート検査を受け再び列車で広州に到着した。目に入ってきたのは「美国帝国主義打倒」という大きな看板である。聞くと、アメリカを中国語で美国ということだった。ベトナム戦争直前であり、中国は政治姿勢そのものが一般社会で、堂々と表現されている社会と感じたものだ。

しかし、広州の人々の私たちへの温かい心配りを感じた。その後、広州から飛行機で、各地で給油しながら、13時間かけて北京に入った。会場は工人体育館でこけら落としの大会であった。1万5千人入る会場は連日満員で、中国で世界的イベントを行うのは卓球が初めてであり、中国政府・党の要人も連日観戦に見えていた。中国の選手の戦法は日本になかった、日本に勝つためといえる前陣攻守で、率直にとっても新鮮であった。男子団体では決勝で中国が日本を破り、初優勝した。その瞬間の会場内の大きなどよめきは、今でも覚えている。世界からの役員、選手も感嘆したし、日本チームはつらかった。

団体戦後の翌日は休養日であり、出場

選手は万里の長城に案内された。そこでは中国の選手たちはいつも我々のそばにいて、通訳を介して笑顔で話しかけてくれ、我々が試合のことを含む緊張から解放されるよう心配りをしてくれた。選手として素晴らしいだけでなく、人として魅力を感じた。その思いはその後から今日までの交流でも変わっていない。結局中国は男子団体と男子シングルス、女子シングルの3種目に優勝、日本も3種目に優勝、他はルーマニアであった。

閉会式の後、日本選手団11名は周恩来総理から夕食に招かれた。北京飯店であったと記憶している。当時、中国が大使級として処遇していた西園寺公一さん夫妻も一緒だった。8時頃食事が始まり、周総理が立たれ、話をされた。私は空腹でもあり、早く食事をとっていたが、周総理の我々を見つめながらの話に空腹も忘れ、聞き入った。ホテルに帰ってから、要約したが、それは次のような内容だった。

「中国の社会制度、人民の生活は他国と比べて遅れている。封建的なものも残っている。纏足のような悪い風習もまだある。このような状況を変えるにはスポーツが極めて大切であると考えている。これからスポーツを盛んにしてゆきたい。その中で卓球は中国人民に非常に合っている

ように思う。日本は先に強くなったので、中国は日本に学んでいる。これからは日本と中国で卓球の交流をすべきと思う。これは卓球選手のみならず、交流を通じて両国の国民もお互いを知ることになるのではない。これから、ぜひ両国の協会のリーダーに推進を考えてほしい」。まだ国交のない時代に中国の総理、周恩来さんがこのような話をされたことで、周総理は本当に大きく日本と中国のことを考える方なのだと、青臭い若者の単純な思いだが、それを強く感じたことを覚えている。そして、その話は今でも心に残っている。

5. 1962年からの毎年相互訪問による日中卓球交歓交流

周恩来総理の目指した両国の卓球交流は62年から文化大革命の直前の65年まで続いた。私の訪中は62年と64年であったが、国内の交歓試合には毎年、選ばれた。中国各地での試合と交流、歴史的建造物の見学や農村訪問など濃密な時間であり、中国側の格別な配慮を感じた。日本の選手も中国の一般の人たちとの接触を大事に考え、積極的な交流を続けた。

一方、日本では、右翼が宿泊先や体育

館近くにやってきての音声での妨害があり中国選手には本当に申し訳なく思ったものだった。しかし、どの会場でも、超満員の観客で、中国選手のフェアーなプレーマナーと礼儀正しい態度は、多くの人々に、卓球が強いだけでなく、素敵な選手たちという印象を与えた。私にとっても、61年、63年、65年の世界選手権団体決勝で中国に敗れ、また、この交流試合で何度も中国選手と試合をしたが、試合後のお互いの健闘をたたえた目と目を合わせた固い握手に、言葉は交わさないものの引き付けられる魅力を感じた。

卓球の試合での選手間の距離は4〜5メートル。顔が見え、どんなプレー戦術を考えているか、気持ちの動きはどうか等を感じ取れる距離であり、それだけに試合後の挨拶に気持ちがいこもるのである。選手として、その後卓球の役員として、友人として今日まで交流が続いているのは、この60年代に真剣に戦った4〜5メートルの距離にもあったと思うている。

6. 中国の文化大革命

1966年、中国のあらゆる分野において社会を作り直すという革命ともいえる動きが伝えられた。25〜26歳の頃であっ

た。私も若くスタート時は革命ということに多少共感を覚えた。67年、世界選手権の代表に選ばれ、今度こそ中国に勝つとして研究もし、訓練に明け暮れていた。しかし、突然、4月にストックホルムで開催される世界選手権に中国が参加をしないとの連絡がITTFから入った。私は愕然となった。私は自分の緊張状態を保てる相手がいることで、自分も成長できるといつも思っていたので、大げさかもしれないが、目の前が真っ暗になった。私は監督兼選手を命じられたが、大会では選手としては団体戦に出ず、監督に集りに優勝し、ほっとしたが、一方では、寂しさもあった。

67年後半には、中国の卓球選手が中国から逃亡したのではないかと社会的に価値のあるものが壊されているというニュースが入ってきた。これは何か、おかしいと感じた。新しい社会主義国家へと向かう流れの中で、資本主義的動きに巻き込まれたと見られたので、卓球選手や指導者が批判されているのではないかと思った。そして、香港より呼ばれた容国团選手や監督、コーチがスパイの嫌疑をかけられ、抗議の自殺をしたというニュースが流された。事実だった。国家に貢献を

してきた卓球選手、指導者、関係者がこのような状況下にあるのかと、悲しくなりました。それで、荻村伊智郎さんたちと一緒に、周総理に「中国の卓球戦手はスポーツ界の改革のために全力をつくしているものと信ずる。また、一緒にプレーできることを私たちは待っている」という電報を打った。届いたかどうか分からないが、居ても立ってもいられない気持ちだった。69年の世界選手権にも中国は不参加であった。

文革も落ち着いてきたと思われた70年11月、翌月開催されるストックホルムでの国際大会に中国が参加するという報道があった。うれしかった。私は翌年、71年名古屋での世界選手権のために選手強化の責任者を務めていたこともあり、日本は選手を派遣していなかったが、視察も兼ねて見に行った。本当によく戻ってきてくれたという気持ちで一杯だった。でも馴れ馴れしいことはできないので、2階席から中国選手と目と目を合わせるだけであったが、それで十分だった。

7. 1971年名古屋での世界選手権

3月末の大会を前にして、中国の参加がはつきりしなかった。そこで、2月、日

本卓球協会の後藤会長は日中文化交流協会の幹部を伴って、名古屋への参加要請をするために訪中した。時間が経つ中、周総理との面会が実現し、その後日中の関係部門の責任者が会談紀要に署名をして、名古屋への中国選手の参加が決定した。

紀要の内容は、「アジアの卓球組織をITTFの憲章に基づき、整頓する。中国敵視政策を実行しない。二つの中国を作る陰謀に加担しない。中日両国の国交正常化を妨害しない」であった。当時、私は日本代表選手選考に関わる意見の違いから強化責任者を辞任していたが、大会では、雑魚寝するような部屋に泊まり、試合を全部観戦した。中国選手からは何度も声が掛かり、ホテルを訪ね面談し、再会を喜び合った。

そして、大会の後半のある日、世界を驚かすニュースが発表された。「大会後アメリカの選手団を中国に招く」というものだった。

大会期間中、アメリカの選手が間違っ

られないが、荘選手は訪日前に周総理に言われた「友好第一に考えなさい」を実践した。後で、荘は毛沢東主席に卓球も強いが政治的意識もしっかりしていると

言われ、体育大臣になっている。選手団は大会後、日本の各地で市民とも交流をし、好印象を残し帰国した。「小さい球が大きな球、地球を動かした」ともいえる名古屋大会であった。72年5月にはニクソン大統領が訪中し、米中の交流が始まった。

8. 1972年9月29日の日中国交正常化の直前に招待され、訪中

72年7月田中角栄総理が誕生した。頭越しのアメリカと中国の交流が動き出し、田中総理は中国との正常化は急務と考えたと思われる。9月初旬、整頓された新組織・アジア卓球連合による第1回のアジア卓球選手権大会が北京で開催された。それに合わせて、中国体育運動委員会より日本卓球協会の老(OB、OG)卓球選手11名が招待された。先輩たちが殆どであったが、私は団長に指名された。広州からの飛行機が遅れ、北京着は9月1日の早朝2時、乗務員より少し機内で待つてほしいと言われた。先に日本政府の関

係者が降り、静かに車で走り去った後、我々が降り始めると、タラップのすぐ近くで、中国対外友好協会の責任者や60年代競い、交流のあった多くの老卓球選手たちが並んで拍手で出迎えており、また花束を持った女子学生たちが「熱烈歓迎」と、声を出してくれていた。中国側が私たちの訪問をいかに大事に考えているかを強く感じた。それは、その後の各地訪問でも同じであった。卓球選手権の一部観戦や、日中の老選手による卓球を深めるための座談会、要人の方々への招待お礼の訪問もあった。

行動の主体は我々の要望も入れてくれた各地訪問であった。北京の他、7つの都市を訪問し、関係者との懇談、卓球の交流試合、市民との交流を行った。延安行きは天候により、飛行機の降り、飛びが狂うことがあると心配されたが、我々の主張を聞き入れてくれた。毛主席の4つの旧居を見学し、当時使用されたままの机と椅子があり、座り、そこで記された「実践論」「矛盾論」「持久戦論」などに思いを馳せた。また、旧居の1つには卓球台もあった。実際に、当時プレーもされていたそうである。

南京では、日本軍国主義の残虐行為の話を知りたいと申し出た。先方は驚かれ

たが、国交正常化前の今、我々はスポーツ人である前に日本人であり、聞かなければならないと考えた。担当の方は、「中国側の史実を基に話します」として、約1時間、静かな声で話してくれた。背中を冷汗が流れた。その夜の歓迎会では私たちを気遣って、年に1度しか咲かないと云われるタンホアの花を用意してくれた。

29日の香港からの帰りの飛行機内の新聞に田中総理が毛主席、周総理と握手している写真が載っていた。感無量であった。私たちは中国に入国してから帰国するまで、日々の行事や各地訪問の内容、感想を皆で話をしながらメモしてきたので、それを「中国を訪問して」と題する報告書にまとめ出版し、お世話になった中国の関係部門と日本の関係者に送付した。

9. その後の日中卓球交流

今年の日中国交正常化45周年となる。政治・経済の深耕が進んでほしいと思うが、それ以上に大切なのが民間の文化・スポーツ・一般の交流である。この面での更なる進展が必要だ。

卓球では、1992年の正常化20年時から、5年ごとに日中の姉妹都市の中学

生卓球選手で1つのチームを作り、他姉妹都市チームと対戦する「日中友好都市卓球交歓大会」を中国側の温かい支援の基に北京で開いてきた。日本側の選手、役員で600〜700人となる。政治的問題にぶつかり、開催が危ぶまれたこともあったが、中国側の強い配慮で継続してきた。今年も6回目が8月に行われる。将来を開く若い両国の選手たちの闊達な交流を期待している。

2006年は1956年に中国卓球選手団がスポーツ交流として、初めて来日してから50周年となることから、北京で両国老卓球選手による記念交流会が行われた。中国側は、日本側の顔ぶれを見て、外国にいる元選手も呼んでいた。56年の東京で対戦して以来、顔を合わせていない人同士の涙の再開など、熱い交流となった。我々の滞在中の動きは中国CCTVでも放映された。

07年は国交正常化35周年を記念し、両国老卓球選手による上海と東京他都市で、一般市民を含む交流が行われた。

08年、当時の中国胡錦濤主席は当時の福田総理と共に早稲田大学で講演をされた。その直後、別の場所で開催されていた卓球台の前で、オリンピック・世界チャンピオンの中国王楠選手と福原愛選手が

練習しているところへ、入ってこられた。シナリオ通り2人の選手がプレーしましうと声を掛けた。胡主席は、待ってましたとばかり、上着を取り、秘書にラケット（マイラケット）と言い、メガネを取って福原選手とラリーを始めた。私から見ても相当にやりこんだ貯金のあるプレーで強いボールを次々と打っていた。それを見た福田総理は、私は結構と辞退された。プレー後、福原選手を傍に招いて話した言葉を私はいまでも忘れない。

「あなたは私のことをあまり知らないでしょう。しかし、私はあなたのことはよく知っている」であった。福原選手は少学4年の時から中国での度重なる訓練、中国チームの一員として国内対抗戦に参加するなどの結果、東北なまりであるが流暢に中国語を話すようになり、多くの中国人に愛され、今日に至っている。彼女の自然な中国との交流姿勢に、見ても心地よさを感じる。日中卓球は、これからも若い人たちに引き継がれ、福原選手のような気負いのない自然な交流が続いていくと思う。私も年齢が高くなつたが、今年は日中国交正常化45周年という記念すべき年でもあり、中国との交流をこれからもバックアップしたいと思っている。

10. 2020東京オリンピック・パラリンピックへの期待

日本選手の活躍で言うならば、5競技増え、開催国としての参加枠増もあり、リオ・オリンピックの金12個、メダル数41個を大きく上回るのは必然と思う。卓球では、特に女子で10代の才能・実績・成長の伸びしろのある選手が多く、今までにない中国との対抗になれると思っている。全般については、私が思うに、来日した選手、役員、観戦者等にベストを尽くしていると感じてもらえる街並み、一般市民やボランティアの対応、競技運営、選手の移動、選手村の食事を含む温かさ等を用意することが大事ではないかと、また、メダル獲得へのナショナルリズムが強くなっている今日、選手間でナショナルリズムを超えたフェアなスポーツマンシップと人間交流を見たいとも思う。それと日本にとって、大事なことは、のちのちまで継続するレガシーだ。2020に向けて努力をした選手が引退後、低料金（これが大切）のもと、地方大学・大学院等で将来の指導者、研究者等に進む道を用意してほしいと願っている。選手であった人の中からそのような挑戦者

が出てきて、2020を通じて専門性を深めた新しいスポーツリーダーが誕生してほしい。彼らは勉強しながら、休日などに地域の子どもたちや中高齢者へのスポーツ指導をすることによってスポーツによる地域創生に、また、スポーツ浸透による国家的課題である医療費削減にも結び付けられると考える。

（2017年3月2日・公開フォーラム）

講師略歴（きむら こうじ）

1940年秋田市生まれ。63年早稲田大学法学部卒業。同年ゼネラル石油（株）入社、総務部秘書課長、人材開発室長、人事室長を歴任、99年退職。1968年早稲田大学体育局講師、2011年退職。現在、公益財団法人日中友好会館評議員、公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会評議員、一般財団法人日本スポーツマンクラブ財団専務理事。主な競技歴、1961年から4年連続世界卓球選手権出場、男子団体、男子ダブルス、混合ダブルスに優勝。61年、64年全日本シングルスチャンピオン。

これからの医療はどうなる、

医療崩壊のルーツは明治維新

NPO法人医療制度研究会副理事長 本田 宏



【はじめに】

先進国一医師不足の日本の中でも最も人口当り医師数が少ない、埼玉県の北東端に新設された済生会栗橋病院で36年間の外科医生活の多くを過ごしたが、3年前に還暦を迎えたのを機に一昨年3月勤務医生活に終止符を打った。

私が外科医を引退した最大の理由は、明治維新以来綿々と続くクレプトラシー（収奪・盗賊政治）を倒さなければ、医療・介護・年金等の社会保障再生はもちろん、保育や教育の充実、労働環境の整備……等々、国民の「基本的人権」を守ることは不可能と悟ったからだ。国民第一の政治を実現するためには日本政治の

本質を見抜く（診断する）ことが不可欠で、健全な体（社会）を取り戻す処方箋を書くために、講演や論文執筆に加え、憲法25条を守る集会や安保関連法反対等の市民活動にも参加している。

白血病発見で有名なドイツのルードルフ・ルートヴィヒ・カール・フィルヒョウ（1821～1902年）は「医療はすべて政治であり、政治とは大規模な医療にはかならない」と宣言したが、今後の日本の医療を考える上でも、日本医療崩壊のルーツ・明治維新に迫りたい。

【高岡善人先生の遺言】

1、東京大学（官僚）のヒエラルキー
医師不足の解決を目指していた私に温

故知新の重要性を伝えてくれたのは、長崎大学名誉教授の高岡善人先生だ。先生は1915年大分県生まれで、39年東京帝国大学医学部を卒業、59年から長崎大学医学部教授を務められた。80年に同大教授を定年退職したのち光輝病院（山口県）院長等を務め、93年に『病院が消える 苦悩する医者告白』（講談社）を上梓していち早く日本の医療に警鐘を鳴らした方だ。

98年に医療制度研究会に参加、2002年には朝日新聞に「ミス招く医療システムの病理」という投稿が掲載される等の私の活動をご覧になっていた高岡先生は06年2月15日に一通のファックスをくださった。冒頭に「昨日はバレンタインデーですが私が女性だったらチョコレー

トをお送りするところです。(中略) 医療に対する90歳の遺言を申し上げたい気持ちを持っています。いかがでしょうか」

とあった。



高岡善人先生
(『病院が消える』より)

先生は早速お宅に駆けつけた私をお寿司までとって歓迎して、敗戦直後の東

大病院内科に勤務して本郷に健康管理センターを立ち上げたこと、三島由紀夫の大蔵省入省の際に身体検査を担当したことなどを交えながら、戦後の厚生(当時)行政の問題について熱心に説明してくださった。その中で今でも忘れられないエピソードが次の2つだ。

①「最も優秀な学生は厚生省に入らない？」

戦後の東大生は全国で一番結核患者が多かった。ある時結核で長期入院している成績優秀な法学部の学生に将来の進路を尋ねると「これだけ長く休んでいれば大蔵省や外務省には入れないから民間に行きます」と答えた。優秀な生徒は厚生省や文部省を選ばない。

日本一優秀とされる東大法学部の中で

もトップクラスの進路の選択には厚生省も文部省も入っていない。一般人には到底想像できないヒエラルキー(階層)が各省庁間に存在していた。そういえば東大卒の評論家の立花隆氏も、日本の官僚は戦前戦中の陸海軍と全く変わらず、いつ卒業したか・成績は何番目だったかという「年次・席次」が一生その人物の昇進や地位に影響すると問題視している。

②「厚生省では医療費を抑制したら偉くなれる？」

「このまま医療費が増え続ければ国家がつぶれるという発想さえ出ている。これは仮に「医療費亡国論」と称しておこう」と厚生省保険局長の吉村仁氏は「医療費をめぐる情勢と対応に関する私の考え方」(1983年3月社会保険旬報)で主張した。日本の医療費削減の方向性を決定づけた吉村氏は省内で強大な力を持っていた。厚生省に入省した自分の後輩(東大卒)がその方針に反対して北海道に左遷された。

1989年から埼玉県北端にできた栗橋病院に赴任して地域医療の現場で医師不足を痛感し、医療制度研究会で勉強して初めて日本の医療費の低さと医師不足の問題に気が付いた私だったが、高岡先生にお会いするまでは「医師として真

面目に働いてさえいれば『お上』が悪いようにするはずがない」と信じていた。ところがより良い医療政策を構築するはずと思っていた厚生官僚自身が「医療費亡国論」を主導していたのである。

そもそも厚生省は東大法学部の勝者が入省する財務省には頭が上がらず、「より良い医療」よりも、財務省の意向に添う「安上がりの医療」を追求せざるをえない構図になっている。これでは厚労省に入省した医系技官が、日本の医療を良くしたいと頑張っても医療再生は困難なはずだ。

高岡先生にお会いした2006年2月19日は、私が日本の官僚の問題にたどり着く記念日となった。

2、渋沢栄一の苦言

高岡先生に初めてお会いして2年後に再会がかなった時、先生は東京老人医療センター(現地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター)に入院中だった。

先生が病床で手渡してくれたのは、老人医療センターが1873(明治6)年に「養育院」として創立されて以降、長らく院長を務めた渋沢栄一の資料だった。残念なことに高岡先生はこの面会の2か月後に他界されたが、渋沢栄一の資料を

渡してくれた理由を、『論語と算盤』（国書刊行会）を読んで知ることとなった。日本資本主義の父として有名な渋沢栄一（1840～1931年、天保11年2月13日～昭和6年11月11日）は、『論語と算盤』で経済人に「道徳経済合一論」の真骨頂である「金儲けだけでは駄目だ、論語に立ち返って社会貢献も考えなければならぬ」と訴え、「時期を待つ必要あり」では「官尊民卑」について以下の苦言を呈していた。

私は日本今日の現状に対しても、極力争ってみたいと思うことがないでもない、いくらもある、なかならず日本の現状で私の最も遺憾に思うのは、官尊民卑の弊がまだ止まぬことである、官にある者ならば、いかに不都合なことを働いても、大抵は看過されてしまう、たまたま世間物議の種を作って、裁判沙汰となったり、あるいは隠居をせねばならぬような羽目に遭うごとき場合もないではないが、官にあって不都合を働いておる全体の者に比較すれば、実に九牛の一毛、大海の一滴にも当らず官にある者の不都合の所為は、ある程度までは黙許の姿であるといっても、あえて過言ではないほどである。これに反し、民間にある者は、少しで

も不都合の所為があれば、直ちに摘発されて、忽ち縲紲の憂き目に遭わねばならなくなる、不都合の所為あるものはすべて罰せねばならぬとならば、その間に朝にあると野にあるとの差別を設け、一方は寛に一方は酷であるようなことがあってはならぬ、もし大目に看過すべきものならば、民間にある人々に対しても官にある人々に対すると同様に、これを看過してしかるべきものである、しかるに日本の現状は今もって官民の別により寛嚴の手心を異にしている。

現在問題となっている「社会保障費抑制や市場化・産業化」の青写真を描いているのは財務省と経済産業省の官僚だが、高岡先生が嘆いた官僚の問題を渋沢も指摘していたのである。東京大学は維新政府が「日本を支える官僚を育成する近代的な大学」として1877（明治10）年4月12日に、東京帝国大学として設立しているが、維新政府が目指した官僚は、天皇の為に働く「皇僕」で、現在多くの日本人が期待する「公僕」ではない。まさに温故知新、私は数々の資料や書籍を読み込んで、明治維新政府の問題を指摘していた人々がいたことを知ることになる。

【維新政府の問題を指摘していた人々】

1、明治天皇

私が26年間勤務した栗橋病院は、明治天皇が「済生勅語」を下されて1911（明治44）年に設立された「社会福祉法人恩賜財団済生会」に属している。

「済生勅語」の大意

私が思うには、世界の大勢に應じて国運の発展を急ぐのはよいが、我が国の経済の状況は大きく変化し、そのため、国民の中には方向をあやまるものもある。

政治にあずかるものは人心の動揺を十分考慮して対策を講じ、国民生活の健全な発達を遂げさせるべきであろう。また、もし国民の中に、生活に困窮して医療を求めることもできず、天寿を全うできないものがあるとすれば、それは私が最も心を痛めるところである。これらの人たちに薬を与え、医療を施して生命を救う——済生の道を広めたいと思う。その資金として、ここに手元金を提供するが、総理大臣は私の意をくみとって措置し、永くこれを国民が活用できるよう希望するものである。

済生勅語が発せられた1911（明治44）年当時は第2次桂太郎内閣だったが、維新政府が欧米列強に伍するため富国強兵策を進め、日清・日露戦争で勝利したものの多くの国民が貧困に苦しんでいた。そのような状況で明治天皇が政治をあやまるものに対して「国民の中には方向をあやまるものもある」と指摘していた事実は、渋沢の苦言と一致する重要な歴史だ。

2、朝河貫一



私は福島県立安積高等学校出身だが、校内には「朝河桜」と呼ばれ歴史学者朝河貫一博士が、この樹の下で英語辞書を一枚ずつ食べて全て暗記したという逸話を繰り返し聞かされていた。

朝河は1873（明治6）年、福島県二本松市に誕生し福島県尋常中学（現福島県立安積高等学校）を経て、東京専門学校（現早稲田大学）を首席で卒業した。渋沢栄一とも親交が深く1895（明治28）年、大隈重信や勝海舟らに渡航費用の援助を受けてアメリカへ渡り、ダートマス大学へ編入学し1936（昭和11）

年に日本人初のイェール大学教授に就任、その後同名名誉教授となっている。

朝河は日露戦争のポーツマス条約（1905年・明治38）締結後の日本とアメリカの満洲・支那に対する対応について所感を纏めた『日本の禍機』（1909年・明治42）を出版し、日本人に警鐘を鳴らしている。

国際感覚の不足が日本の将来に禍いをもたらすのではないか。

戦いのことについての日本の記事は当地の新聞より短く、本国の日本人には何も知らされていないのではないかと心配です。

事情がよく知らされていない日本では罪のない忠実な一般の人民が最も気の毒であります。

日本人は愚かな指図や悪い指揮にも簡単に従ってしまう傾向がある。

『日本の禍機』出版後約30年が経過した1941年に、日本は太平洋戦争に突入、朝河はアメリカに残りフランクリン・デラノ・ルーズベルト大統領に日米開戦の回避、戦争早期終結を働きかけるなど尽力したが、国民は原爆投下そして無条件降伏という塗炭の苦しみを味わうことになった。

現在もグローバルスタンダードを無視

して医師不足や低医療費、TPP、年金原発再稼働、基地問題：などの重要課題はあえて報道しない日本メディアと、それに国民の多くが従順に従う構図を見れば朝河貫一の警鐘は21世紀の今も生き続けている。

3、ホセ・マルティ（キューバ）

経済大国にもかかわらず先進国最低に医師数と医療費を抑制している日本で医療再生を訴えてきた私にとって、1959年の革命以来、米国の過酷な経済制裁下でも医療や教育を無償で提供するキューバは憧れの国だった。

2013年11月と2015年3月の2度キューバ医療視察に参加した際に、その名前を冠したホセ・マルティ国際空港やキューバ革命広場の像で、今でも国民から絶大な尊敬を集めている革命の使徒ホセ・マルティ（1853年1月18日〜1955年5月19日）の存在を知った。

マルティはスペイン帝国を相手に戦った第2次キューバ独立戦争（1895年〜98年）で戦闘中に亡くなった思想家で、1959年にキューバ革命を果たしたフィデル・カストロやエルネスト（チェ）・ゲバラらに多大な影響を与えている。

マルティに興味を持った私は『椰子よ

り高く正義をかかげよ ホセ・マルティの思想と生涯』(海風書房)の日本語版序文で、マルティ研究所副所長のペドロ・パブロ・ロドリゲス氏が書いた、マルティが明治維新政府をどう見ていたかを記載した一文を発見した。

以下、同序文より

(マルティは)ベネズエラの読者にもこう書いている。「近代生活は、激しくきらびやかに、日本にどっと入り込んでいく」。これは、多くの人々が観察した事実が証明しているところであるが、彼は「激しくきらびやかに」と述べるにあたって、それを反語的に紹介しているのである。(中略)

天皇が「皇室内の金の彫像であり、目に見えない神」であったとき、首相や取り巻きが国の収入や運命を手中にして、自分たちの高い身分の保障と利益のために、国民を無知と貧困の状態に置いていたのである。

マルティが指摘した「首相や取り巻き」とは、渋沢や明治天皇が嘆いた維新政府の中樞を占める人々と政商であったに違いない。明治維新政府の実態が、遠くアメリカ大陸のホセ・マルティに喝破されていたことは驚くばかりだ。

【医療崩壊のルーツ明治維新】

1、明治維新を支えたアヘンマネー

ほとんどの日本人はドラマや映画に登場する坂本龍馬、高杉晋作、吉田松陰など維新の志士を、日本を文明開化に導いた英雄と捉えているのではないだろうか。しかし冷静に考えれば、当時まだ20代から30代だった若者が、265年続いた江戸幕府の体制に終止符を打ち、欧米列強の植民地化から救う力を持っていたとは考えにくい。

明治維新前夜の世界を振りかえれば、19世紀初頭英国は大英帝国として世界を席巻し、アジアでは英東インド会社が清国から茶と陶磁器・絹を輸入し、インドへは綿織物を輸出、そして清国・インドで栽培したアヘンを輸出していた。これがかの有名な英国の三角貿易だ。その後英東インド会社に代わってアヘン輸出の主役に躍り出たのは、英東インド会社の船医だったウィリアム・ジャードインがジェームス・マセソンと中国広州に設立したジャードイン・マセソン商会だった。明治維新の28年前1840年に第1次アヘン戦争が起きた時、この商会は英国議会上にロビー活動を行って大英帝国艦隊を

清に展開させるほどの強大な政治力を有していた。

その約10年後の1853年、浦賀に米国東インド艦隊司令長官マシュー・ペリーの黒船が現れ、日本は幕末のドラマに突入する。このドラマに必ず登場し今も長崎に残るグラバー邸の主人公トーマス・ブレイク・グラバーのつくったグラバー商会こそアヘン貿易で巨万の富を得たジャードイン・マセソン商会が日本に作った長崎代理店だった。1861年設立のグラバー商会は坂本龍馬を介して武器販売を行い、倒幕に決定的な影響を与えた1866年の薩長同盟を支えることになる。

1868年に江戸城が無血解放、会津戦争や函館戦争で旧幕府軍を制圧した維新政府は、未だ残る不平士族等の国内問題を西郷隆盛らに託して、岩倉使節団を1871(明治4)年から1年10か月に渡って米国と欧州に送りだした。木戸孝允、山口尚芳、岩倉具視、伊藤博文、大久保利通ら「薩長を中心に組織された使節46名」の目的は不平等条約の見直しだったが、欧米の情報入手する術の乏しかった時代、この使節団が帰国後日本政治の中樞で活躍することになったのは至極当然の結果だった。

そして驚くべきことにこの使節団のメ



ンバーで、1885（明治18）年に日本で第1回帝国議会が開催された時の初代内閣総理大臣となった伊藤博文にもシャードン・マセソン

商会は多大な影響を与えている。伊藤は維新の5年前1863年に長州ファイブの1員として英国留学を果たしたが、この5人の面倒をみたのもグラバーとシャードン・マセソン商会だ。英語も満足にできぬままロンドンの地を踏んだ20代の若者が、明治維新政府の中枢を占めた後も一生涯にわたって英国に大きな恩義を感じていたことは想像に難くないだろう。

2、消された「四民平等」主義者

実は明治維新当時に現在の民主主義に通じる「四民平等」を目指していた人々

がいた。それは坂本龍馬、佐賀藩出身で日本司法の父とされる江藤新平、そして薩摩の西郷隆盛だが、この3人はいずれもほどなくして不幸な運命をたどることになる。坂本龍馬は大政奉還の約1か月後に「京都土佐藩邸目前の近江屋」で中岡慎太郎との会談中に暗殺された。江藤新平は司法卿として「今清盛」と呼ばれるほど権勢をふるっていた井上馨大蔵省長官（長州）の尾去沢鉦山私物化問題を追求し、逆に佐賀の乱で罪を問われて1874（明治7）年に処刑されている。西郷隆盛は征韓論の論争に敗れて下野を余儀なくされ、西南戦争で1877（明治10）年に自刃に追い込まれた。

四民平等を訴える人々を粛清した後の政治がどうなったか、それはその後の維新政府の歴代内閣総理大臣を見れば明らかだ。アヘンマナーを背景に初めこそ長州と薩摩が交代で総理大臣を送り出しているものの、その後長州の1人勝ちの政治が築き上げられている。百姓の家に生まれて足軽の養子となった伊藤博文は4回も総理大臣を務めて維新政府の要職を歴任し、足軽の子に生まれ第3代総理大臣となった山縣有朋も日本軍閥の祖となつて山城屋事件を起こすなど、現在にも続く金権政治のルーツとなっている

一方経済界では阪本龍馬亡き後、海援隊では龍馬と一緒だった岩崎弥太郎が戊辰戦争や西南戦争の軍事輸送や、維新政府の紙幣貨幣全国統一化に乗じて莫大な利益を得るなどして「国家の三菱」と言われるまでに台頭している。弥太郎の娘婿4人の中から、加藤高明及び幣原喜重郎の2人が内閣総理大臣となったことも三菱と国家の密接な関係の証明で、政治と財閥が密接に結びついて利益を最大化する一方国民の生活困窮は放置する、これが渋沢や明治天皇、ホセ・マルティが指摘した維新政府の実態だった。

このように私たちが美化してきた明治維新は、英国のアヘンマナーを背景に薩長の下級武士が皇室を「錦の御旗」に政治利用して徳川からクーデターで政権を奪取、その後身内の財閥と手を結んで自身の利益を最大化した政変だったのだ。

【維新政府が目指した大日本帝国】

多感な青春時代に「大英帝国」を視察して多大な影響を受けた伊藤博文らが、欧米列強に追いつき追い越せと「富強強兵・殖産興業」を奨励し、「大日本帝国」を目指したことは自然の流れだった。

その後日本は1895年の日清戦争に

勝利して多額の賠償金を獲得し戦争の甘い蜜に酔うことになる。1902年には大英帝国が初めて他国と結んだ軍事同盟「日英同盟」を締結したが、英国の目的は極東におけるロシアの南下から英国が自国の利権を守るためだった。二匹目のドジョウを狙った日露戦争では、当時日銀副総裁だった高橋是清が英国や米国から莫大な戦争資金調達に成功して勝利を収めたものの、ポーツマス条約でロシアからの賠償金獲得に失敗した。

日清戦争の甘い蜜の記憶と、この莫大な借財返済が陸・海軍が政治を牛耳る「軍閥」政治体制へと道を開き、関東軍の暴走による満洲進出、英米と敵対する太平洋戦争へ突き進み、世界初の原爆投下による無条件降伏となったのである。

【戦後の官僚と財界は】

1945年8月から日本は米大統領ハリー・S・トルーマンが全権を与えた連合国最高司令官ダグラス・マッカーサーによって占領された。連合国軍最高司令官総司令部（GHQ・進駐軍）は、日本の既存の体制を利用する間接統治が円滑に進むと判断し、天皇制と官僚体制を維持した。1946年、GHQは主権在民、

象徴天皇制、戦争放棄、男女同権などを盛り込んだ日本国憲法を成立させ、改革の柱として戦争協力者の公職追放、戦争推進に協力した財閥解体、さらに農地改革などを計画した。しかし朝鮮戦争勃発やアメリカを盟主とする資本主義・自由主義陣営とソ連を盟主とする共産主義・社会主義陣営との対立が悪化して、戦争協力者の公職追放と財閥解体は不十分に終わった。悪

運強く官僚と財閥は生き残ることになったのである。2009年9月に「官僚政治見直し、シロアリ退治を訴え



て戦後初の本格的政権交代を果たした民主党は、その後鳩山総理の辺野古移設撤回や小沢一郎氏の証拠捏造裁判等がメディアに繰り返し報道されて12年12月で瓦解した。日本の「報道の自由度ランキング」が民主党政権の時だけ高かったのも、財界と官僚とメディアがタッグを組んだ結果と考えれば納得しやすい。

【米軍と官僚が日本の頂点に】

最近『日本はなぜ、「戦争ができる国」になったのか』（集英社インターナショナル）で矢部宏治氏が衝撃的な事実を明らかにしている。戦後70年が経過した現在まで日本側代表は外務省北米局長、米国代表は在日米軍司令部副司令官が参加する「日米合同委員会」が毎月2回開催され、こ

の委員会が日本の法的権力構図のトップに君臨していることを暴き出した。さらに

日米合同委員会	
日本側代表	外務省北米局長
代表代理	法務省大臣官房長
	農林水産省経営局長
	防衛省地方協力長
	外務省北米局参事官
	財務省大臣官房審議官
米側代表	在日米軍司令部副司令官
代表代理	在日米大使館公使
	在日米軍司令部第五部長
	在日米陸軍司令部参謀長
	在日米空軍司令部副司令官
	在日米海軍司令部参謀長
	在日米海兵隊基地司令部参謀長

大きな問題は本委員会に出席した歴代法務省大臣官房長の多くが事務次官を経て検事総長になっており、日本の司法までもが米国の強い影響下にあることが白日のもとにさらされたことだ。1949年の松川事件、田中角栄のロッキード事件、

小沢一郎氏の証拠捏造裁判等々、戦後米国内に不利な状況を日本の司法が冤罪まで駆使して解決し、逆に米国や官僚に近い人々の贈賄疑惑などは不問にされてきた。これらも「米軍+日本の官僚」が日本の頂点に君臨する体制であることを見れば納得できる。アメリカによる日本の間接統治は終わっていないのだ。

2013年12月6日に「特定秘密保護法」が、15年9月17日には「安倍関連法」、昨年11月4日に「TPP関連法案」、昨年11月25日には「年金削減法案」が各委員会で強行採決された。残念ながら現在の日本では立憲主義（憲法で国家権力を縛る・権力の分立人権を守る・多数派の横暴を防ぐ）が機能していない。キューバに2回、一昨年9月にはベトナムを訪れたが、海外から日本を見れば、私たち日本人は現在まで民主主義を自身の手で勝ち取っていない現実を痛感する。

ホセ・マルティが指摘したように日本のごく「一部の人々」は明治維新から敗

戦までは天皇を、そして敗戦から70年間には米国を盾に「国の収入や運命を手中にして自分たちの高い身分の保障と利益のために、国民を無知と貧困の状態にしている」。

【おわりに】

昨年7月10日の第24回参院選で、全国で野党共闘が実現し現役大臣2人が破れ、全国の1人区では大幅に議席を増加、鹿児島県知事選で勝利した。さらに昨年10月16日に行われた新潟県知事選では、柏崎刈羽原発再稼働に慎重な米山隆一氏が、与党推薦有力候補を打ち破って勝利した。特筆すべきはママの会やSEALDsなど将来の日本を担う若者層が「民主主義を守るのは自分だ」と政治に目覚めたことだ。しかし、このように明るい兆しは見えるものの、明治以来148年続く盤石に構築されたクレプトクラシーを打倒して国民が真の民主主義を勝ち取るには、ほんの第一歩を踏み出したに過ぎない。一方、俯瞰的な視点で日本史を振り返れば終わりのない時代はなかった。私は今後も講演や市民活動を通して、選挙による日本初の市民革命達成を目指して弛まぬ努力を続ける所存だ。皆さまの応援を

心からお願ひして筆をおきたい。
(2017年2月16日・公開フォーラム)

講師略歴（ほんだ ひろし）

1954年福島県生まれ。
79年弘前大学医学部卒業、同第一外科に入局。その後、東京女子医大腎臓病総合医療センター外科で腎移植、肝移植の研究に携わった。89年埼玉県済生会栗橋病院に外科部長として赴任、2001年同病院副院長、11年院長補佐。15年栗橋病院退職、情報発信と市民活動への参加を通して、医療&日本再生を目指している。

著書『誰が日本の医療を殺すのか』『医療崩壊』の知られざる真実』（洋泉社、2007年）、『医療崩壊』のウソとホント 国民が知らされていない現場の真実』（PHP研究所、2009年）、『本当の医療崩壊はこれからやってくる！』（洋泉社、2015年）。共著『がんになる性格、ならない性格』（廣済堂出版、2016年）。

翻訳家が語る、 魅力ある中国文学の世界

翻訳家 泉

京鹿



それから文芸翻訳という仕事について、その現状について紹介させていただきたいと思います。

昨年9月に『紫禁城の月』が共訳で、さらに11月には『炸裂志』の翻訳が刊行されました。翻訳者の仕事は翻訳したら終わり、ではなく、作品を一人でも多くの方に知っていただき、読んでもらうために、出来る限りのことをしたいと思っています。毎日膨大な数の新刊書籍が書店に並びます。翻訳者として、自分が翻訳した作品がどれだけすばらしい本かと自信を持っていたところで、ほんとうにたくさん本のの中で、一冊の本の存在を知ってもらい、手に取って読んでもらうことは簡単なことではないと思います。今日はずうずうしく、訳書の紹介といいますが、宣伝の一環のつもりで参上しました。

これまで、共訳もあわせて十数冊の中国文学作品を日本語に翻訳してきました。

その多くが、中国では百万部を超えるベストセラー、ロングロングセラーです。残念ながら日本語訳のほうは、人口比は別にしてもベストセラーというほど売れたものはありません。それでも、いずれの作品も少なからぬ日本の読者に読んでいただき、新聞、雑誌などの書評のほか、ネット上で多くの好評をいただけてきました。日本で漫画化、舞台化された作品もあります。

今日の世界において、政治的にも経済的にもますますその存在感を高めている中国ですが、日本語で読める現代中国文学作品は充実しているとはいえ、わたしのようにこの仕事をメインにしている翻訳者も、英語やフランス語などほかの言語に比べればまだまだそう多くはないようです。まずは、わたしの自己紹介、

「泉 京鹿」という名前ですが、結婚前までの本名で、40年近く使ってきた本名ですが、取材を受けた際などに、「どうしてこんなふざけたペンネームをつけたのですか」「泉鏡花のパロディみたいなペンネームですよ」といわれたこともあります。今は、ほんとうにペンネームになっています。

東京で生まれ、神奈川県で育ちました。大学に入学するまで一切、中国とはこれといった縁もなく、大学も中国とはさらに縁のなさそうな、チャペルのあるプロテスタントの女子大学に進学しました。それが、第2外国語で選択した中国語に、

というよりは夏休みの短期留学で訪れた北京の虜になり、大学卒業後そのまま北京に留学、就職しました。それから出産を機に帰国するまで約16年間暮らしていました。実は16年のうち、留学、就労ビザを持って働いていたのは約半分の8年間だけで、残りは限りなくグレーなビザで滞在でした。所属先のないフリーランスだったからです。広告代理店から始まって、主にメディア関係でいろいろな仕事をしてきましたが、最終的に落ち着いたのが、2003年に第1作刊行となった文芸翻訳です。2002年に始めました。

わたしをこの世界に導いてくれたのは、日本在住の中国人作家で神戸国際大学の毛丹青教授です。「翻訳をやってみませんか」と声をかけてもらった際、「第2外国語で始めた中国語で専門的な勉強はしていないので、自信はありませんが興味はあります」というと、毛さんは「母国語の力と情熱があれば大丈夫」とわたしの背中を押してくれました。最初はとにかくわからないことだらけなので、毛さんを始め、信頼できる人、周りの人あれこれとんでも聞きました。今でもわからないことがあれば遠慮なく人に聞きます。通訳と違って、翻訳は時間さえあれば、ずうずうしく、人にもツールに

も頼ることができません。確かにここまでわたしがやってこられたのは「日本語」と「情熱」の勢いのおかげです。

文芸翻訳という言葉を使いましたが、要するに小説の翻訳です。ノンフィクションや、歴史小説もやります。基本的には今生きている作家、直接面識がある作家の作品です。さらに言えば、中国で売れている、ベストセラーがメインです。売れているにはそれなりの理由があり、同じ時代を生きる中国人の多くが読んでいるものを、わたしたち日本人が読むことで何か得るものがきつとあるはず、と信じているからです。それから、原書を読んで、素直に面白くて、「中国語の読めない日本人にも読んでもらいたい」という気持ちもあります。

いわゆる技術翻訳、商業翻訳とどう違うかという点、それはまず訳者の自由度にあるのではないでしょうか。法律や仕様書などの翻訳であつたら、対応する言葉がきちんと決まっているべきで、あいまいなものであつてはならないでしょう。小説の場合、そうとは言い切れないのではないのでしょうか。もちろん、きちんと対応する言葉はそれぞれにあるはずですが、翻訳者が十人いたら十通りの訳があつ

ていいと思います。

「翻訳の自由度」でいえば、たとえば、まず人称名詞です。中国の小説では老若男女、性格を問わず、一人称は「我」を使うことがほとんどです。「俺」「老子」などが出てくることもあります。多くはありません。それを日本語にする場合、特に活字にする場合には、その選択肢は豊富です。「私」「わたし」「ワタシ」「あたし」「アタシ」「わたくし」「ワタクシ」「わし」「ワシ」「うち」「ウチ」「俺」「おれ」「オレ」「僕」「ぼく」「ボク」「吾輩」……何を使うか、さらには漢字かひらがなカタカナかによって、性別、年齢、そして性格のイメージがわきます。もちろん、人によって抱くイメージは異なるでしょう。しかし、書き手にとってはその人物の性格や役割において、この一人称にはそれなりの理由があつて、人物によって使い分けられるものです。あるいは、男性的な一人称を使う女性や、老人を思わせる言葉遣いの子どもなど、いわゆる性別や年齢のイメージを裏切るために、あえて使われる場合には、その一人称はさらに重要な意味を持つてくることもあるでしょう。中国語ではほぼ全員、主語が「我」なので、登場人物の唐突なセリフで、それはいったい誰が発したも

のなのか、一瞬混乱する場面もあります。前後をよく読めばわかるのですが、その部分だけを切り取ったら混乱する可能性は高いです。「我」をすべて「わたし」のままにするのか、あるいは「わたし」「僕」「私」「オレ」などを使い分けるのか、著者のため、作品のため、読者のため……どちらが望ましいのかは、著者によって、作品によって、読者によって、それぞれ異なると思われ、わたしの中でも明確な答えはありません。ただ、原書を読んでみると、自然に脳内変換されて、登場人物のそれぞれが主張する一人称の日本語が頭に浮かびます。そうすると、翻訳するにあたって、者のひとりにすぎない自分の中で聞こえてくる登場人物の声に従わざるをえなくなります。500ページ、1000ページに及ぶような長編小説になると、最初の方と最後では、人物のイメージが変わってきて、一人称にもずれが生じることがあります。そういう場合は、何回も読み直して、声に出してみたりして、イメージが固まるのを待ちます。声に出して読んだり、中国人の友人、あるいは著者本人に、自分の抱いたイメージを説明して、「わたしはこういう印象をもったがキャラクターのイメージは間違っていないか」と確認し

たりもします。

一人称では日本語のほうが豊富ですが、親族の呼称に関しては、中国の方が豊富なものもあります。たとえば日本語で「おばさん」と書いてあったら、中国人が中国語に翻訳する際、「このひとは主人公とどういう関係なのか」「他人でなく親族である場合、母方なのか」「父方なのか」「父よりも年上なのか、年下なのか」「自分の親の実際の兄弟なのか、その配偶者なのか」……と確認しなければなりません。それぞれに呼称があるので、知らないで訳せないわけです。中国語では呼称だけで瞬間的にその関係性がわかります。日本語でわかるように訳すと説明くさくなってしまう。

また「我愛你」を日本語に訳すとしたら、語学の試験であれば「わたしはあなたを愛しています」で正解かもしれませんが、小説の翻訳ではそういうわけにはいきません。「愛してる」「アイシテル」「大好き」「きみだけだ」「会いたかった」「別れたくない」……場面によってはいずれもあり得るのではないのでしょうか。

あるいは「不要哭」は、「泣くな」「泣かないで」「大丈夫」「うるさい」「黙れ」……こんなふうには訳した方がふさわしい場面もあると思います。主語は省いたほ

うが自然な場合も多いです。

あくまでもわたし個人の印象ではありますが、日本語に比べると、一般的に敬語も多くはなく、男女の話し言葉に日本語ほどの厳密な区別がない中国語では、登場人物のキャラクターのイメージを浮かび上がらせる表現の自由があるのも、文芸翻訳の楽しみの一つです。

一人称に限ったことではありませんが、たったひとつの言葉、一行にふさわしい訳語をみつけるために、数時間、ひいては一日中机に向かっていても1ページも進まない日もあります。ものすごく非効率だとは思いますが、どれだけ時間がかかってても、思いがけずぴったりくる言葉を見つけられたときには、とても幸せな気持ちになります。言葉とまっすぐに向き合う贅沢な時間です。

気持ち的には大変贅沢な文芸翻訳ではありますが、経済的には贅沢とは無縁です。

文芸翻訳とは、「時間がかって経済効率の悪い、稼げない、好きでたまらない人にしかできない仕事」です。

正直なところ、自分の生活費すらまかなえないような収入なので、独身時代は親に、今は夫に経済的に世話になりっぱなしです。時間をかけて一生懸命仕事を

すればするほどお金がなくなっていくので、「仕事とはいえない」という声もあります。この仕事を続けられるよう、経費を稼ぐため、勉強のため、ほかにもさまざまな仕事もしています。文芸翻訳は長時間労働で、時給に直したら、おそらく驚くべき低賃金であることは間違いない、ブラックな職業ですが、もちろんわたしは好きで続けています。

文芸翻訳ならではの喜びがあります。まず、「誰よりもディープな読者になる」という贅沢を味わえます。前述のように絶対的な翻訳はありませんから、自由があります。そして、何といっても、日本でまだ知られていない作品や作家を発掘する楽しみ、喜びは何にも代えがたいものです。また、翻訳者というのは著者から大事にされます。中国では誰もが知っている、あるいは世界的にも著名な作家でも、家族ぐるみでお互いの家を行き来したり、一緒に旅行をしたり、親しいきあいが続きます。何時間も語り合い、作家の考えているさまざまなことを直接聞かせてもらえます。これも、大変な贅沢ではないでしょうか。

そして、これは翻訳者の誰もがやっているわけではないかもしれませんが、わ

たしとしては、「最初（版權契約）から最後（プロモーション、読者との交流など）まで」関われるところにも大変なやりがいを感じています。それに伴う経費の出費もかさみますが、さらに収入につながる場合もあります。以前広告代理店で働いていた経験や、メディアコーディネーターをしていたときの経験も生きていると思います。こういう作業も好きです。翻訳は孤独な「静」の作業と、人と顔を合わせて話をするのが中心になる、本が出たあとの「動」の作業の両方がある、精神的なバランスもとれる気がします。自己満足の世界かもしれません。

「増刷を重ねて、印税生活！」という夢も見られますが、宝くじ並みに確率の低い夢ですが。

では、次のデータをご覧ください。

日本で読まれている中国の本と、中国で読まれている日本の本とを比較した

輸入と輸出の不均衡・中国における書籍版權輸出入状況

	中国における版權輸入（中国語への翻訳）		中国における版權輸出（中国語からの翻訳）	
	日本→中国	韓国→中国	中国→日本	中国→韓国
2006年	484	315	118	363
2007年	882	416	73	334
2008年	1134	755	56	303
2009年	1261	799	101	253
2010年	1766	1027	214	360
2011年	1982	1047	187	507
2012年	2006	1209	401	282
2013年	1852	1472	292	656
2014年	1736	1160	346	623

「中国伝媒体藍皮書」より

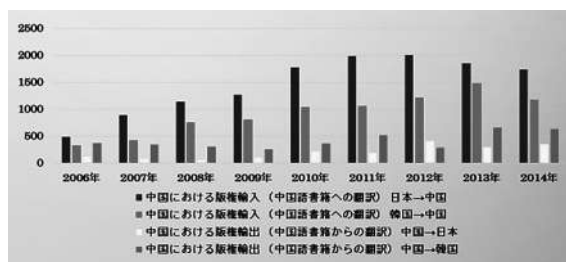
データです。

この統計に実際に流通している書籍のすべてが反映されているとは思えないので、数字としてはあまり役には立ちませんが、実感として、この比率はほぼ正しいのではないかと思っています。ここ

に韓国の数字も入れたのは、日本の数字が中国の10分の1であるという事実を、人口比率のせいにしたくないからです。

中国で日本語からの翻訳がいかに読まれているかがわかります。それに対し、日本で読める中国語からの翻訳の少なさは顕著です。「中国は人口が日本の10倍以上なのだからこれくらいの差は当たり前ではないか」と思う方もいるかもしれませんが。しかし、韓国と比較するとよくわかります。同じ比較を韓国と中国で見ると、日中間ほどの大きな差はあり

中国における書籍版權輸出入状況
（対日本及び韓国）



ません。韓国の人口は日本よりも少ないですが、韓国で読める中国語からの翻訳は日本よりずっと多く、中国で読める韓国語からの翻訳よりも多くなっています。翻訳者もたくさんいるでしょう。一方、中国の書店には日本語からの翻訳がいかにたくさん並んでいるかということがよくわかります。

2015年に撮影した写真です。写っている書籍はすべて日本語から翻訳されたものです。

2016年にはさらに平積み面積が拡大していました。日本関連書籍を眺めたり、手に取ったりしている中国人に、「どうしてその日本の小説を読もうと思ったのですか」「日本語はできますか？」などと話しかけると、「友だちに勧められて」「映画の原作だから」「日本語はできない」という答

北京市内の書店「PAGE ONE」の日本関連書籍コーナー



えがかえってきます。特別に日本に興味があるというわけではなくても、なんとなく手にとれる選択肢に日本文学が、日本関連書籍があるというのは嬉しいことです。

もともと今回の講演は、『紫禁城の月』『大清相国』について話を」とお声をかけていただいたのですが、恥ずかしながら歴史があまり得意ではなく、歴史的な話など語ったらただポロが出るかわかりません。歴史的な考証については、担当編集者と共訳者に任せきりでした。長年の親友である北京在住の共訳者・東紫苑さんは、とにかく歴史が好きで、ほぼ独学で中国の歴史を、さまざまな原書をあたってマニアックに研究しています。主人公である陳廷敬の山西省にある生家を訪れたときのことや、小説の中では詳しくは述べられていなかった実際の歴史のエピソードなどについても書かれていますので、ブログ『いちんたん 北京ときどき歴史随筆 翻訳者・東紫苑（あずましおん）のブログ』<http://blog.goo.ne.jp/yichintang> をご覧いただければ幸いです。

この本の著者について、またこの本がベストセラーになった作品をめぐる背景

について、『朝日新聞 GLOBE』の連載で紹介したことがあります。その記事を読んで、情熱的な女性編集者がわたしの講演を聞きに来てくれて、翻訳企画を進めてくれました。原書で読んで、訳したいという気持ちはあったものの、歴史ものにまったく自信がなかったので、友人に声をかけ、共訳という形で進めることになりました。けれど最終的にこの作品の翻訳が完成したのは、この東紫苑さん、そして大変に優秀な担当編集者の森山文恵さんという2人の女性の力です。わたしの貢献など共訳者として名前を入れてもらうのを遠慮したい微々たるものでした。ただ、この作品の著者である王躍文の作品を原書で読んだのは、わたしは日本人の中ではかなり早い方だったかもしれません。日本での翻訳、刊行に結びつく記事を書いたことにはそれなりの貢献はあるかもしれません。中国が建国60周年を迎えた2009年10月に朝日新聞 GLOBEで、『朱鎔基答記者問』とともに『黄蒼』を紹介したのが王躍文の作品を紹介した最初でした。

……（前半省略）……いかに厳しく取り締まろうと、汚職・腐敗を根絶するのは不可能に近い。朱鎔基時代然り。

『蒼黄』は「官界小説」の第一人者といわれる王躍文の最新作。外国人には把握しにくい中国の地方政府の役人の肩書や地位、微妙な上下関係、権力範囲がわかる小説だ。タイトルは、エピソードに引かれて「蒼に染むれば則ち蒼となり、黄に染むれば則ち黄となる。ゆえに入る者変ずれば、其の色も亦た変ず」（『墨子・所染』）に由来する。……（中略）……政治の世界で清廉潔白であることは、かくも生きにくいものなのか。著者の身辺も穏やかではない。湖南省政府、懷化市政府の職員だった過去の経歴から、登場人物のモデルや実際の事件との関連があれこれと取りざたされる。版權契約でもめた別の出版社が、修正前のゲラ段階の本作品を『落木無辺』（上下）としてすでに上巻を刊行。著者は下巻の発売停止と100万円（約1300万円）の損害賠償を求めて訴えを起こした。海賊版も後を絶たない。官界のみならず、出版界の闇もまだまだ深い。

（2009年10月5日『朝日新聞GLOBE』）

『紫禁城の月』の原作である『大清相国』を紹介したのは2014年3月6

日の同じく『朝日新聞GLOBE』の世界の書店から」でした。

今からちょうど2年前（2012年）、3月半ばの全国人民代表大会（全人代）閉幕後に、中国の政界を大きく揺さぶる解任劇が明るみに出た。当時の重慶市トップで最高指導部入りも目されていた薄熙來の失脚である。それ以上の大捕物として今注目されているのが、前政治局常務委員の周永康だ。元秘書ら関係者が次々に拘束され、2月末現在、本人は汚職容疑で軟禁状態にあるという。そんな中央政府高官の汚職を容赦なく取り締まる中央規律検査委員会のトップが王岐山。昨年この欄で「アレクシス・ド・トクヴィルの『旧体制と大革命』を人々に薦めている」と触れたように、本当に読書家で、しかも読んだ本を人に薦めずにはいられない性分らしい。

歴史小説『大清相国』も王の愛読書であり、部下らに薦めていることが雑誌で紹介され、話題を呼んだ。物語は、清の順治年間に科挙に合格し、次の康熙帝に約50年仕えた陳廷敬の生涯をたどる。6部門のうち4つの尚書（長官）を歴任し、権力闘争や腐敗に屈せず、

愚直なまでに清廉に公正に、皇帝に忠義を尽くし、庶民の気持ちも理解した「理想の官僚」として描かれる。

科挙の最終試験に優秀な成績で合格しながら、役人に賄賂を贈ることもせず、身内や友人の不正にも目をつぶれない真面目な性格ゆえ、次々にトラブルに巻き込まれる。朝廷に仕えてからは。率直な進言も恐れなかったために皇帝の怒りを買ひ、幾度となく絶体絶命の危機に。それでも欲望渦巻く伏魔殿を生き抜いたのは、その才能と人柄にひかれた人々に助けられ、皇帝自身もその才能と忠義、愚直さを認め。信頼したことにある。

……（中略）……

著者の王躍文は元公務員で、「官界小説」の名手。いつの時代にもはびこる役人の汚職、力の複雑な渦の中でもがき苦しむ主人公たちの姿に、読者は現実社会の絶望と希望を見るのだろう。

汚職取り締まりに大ナタを振るう王岐山が公務員に本書を薦めるのは、陳廷敬に倣えというメッセージか。あるいは同じ山西省に出自を持ち、最後まで政界を生き抜いた「不倒翁」、陳廷敬に自身を重ねているのか。

（2014年3月6日『朝日新聞GLOBE』）

〇 B E

この文中で触れた中国共産党中央の人事はこの数年で大きく動き、薄熙来に続いて結局は周永康も失脚しています。浮き沈みの激しい中国の官界の頂点、中国共産党中央で、王岐山は江沢民主席時代の朱鎔基首相に手腕を認められ、胡錦濤、習近平とトップが代わっても習近平政権の汚職撲滅の、ひいては習近平政権そのもののキーパーソンでありつづけているようです。その王岐山の愛読書であり、部下に、公務員に読ませたいという本書には、時代は変わっても、清廉であることの大切さ、中国の官界の闇、そしてその闇にのまれることなくいかに生き抜くかというヒントに満ちています。実際、数百年を経て、王朝も制度も異なるというのに、中華人民共和国の官界でいま起こっていることはあまり変わらないようです。

中国人は時代小説やSF小説の中にも、自分たちの生きる時代や現政権への批判、メッセージを読み取ります。それが著者の意図したところなのかどうかは別に、小説であれ、ノンフィクションであれ、少なくともあからさまな、ストレートな政治批判は許されない現状では、書き手と読み手の間にそういう前提や呼吸

のようなものが必要なのでしょう。ちなみにSFでは、2015年に劉慈欣『三体』が長編小説部門で、2016年に郝景芳『北京折疊』で、2年連続で中国人作家の作品がヒューゴー賞を受賞しています。いずれも英語版の訳者は邦訳『紙の動物園』などで日本でも知られる作家ケン・リュウです。こうして世界に認められた中国のSF小説には、今後も期待したいところです。

閻連科の名前が世界的に広く知られるようになったのは、2014年に村上春樹に次いでアジアでは2人目、中国では初のカファ賞受賞作家となったことが大きいでしょう。近年、ノーベル文学賞候補としても取り沙汰されることが多く、イギリスのブック・アワードにも2度上がっています。(2017年4月時点・2017年『炸裂志』で3度目の候補に)

閻連科については、『炸裂志』の記者あとがきを読んでいただけで幸いです。作家の経歴や作品の紹介もしていますが、わたしと閻連科の出会いから現在にいたるまで、どうしてわたしに『炸裂志』を翻訳することになったのかということ、閻連科の日本とのかかわりを、この10年ほどを振り返って書きました。

作家に限らず、中国で著名人が政治や社会に対して批判的な発言をするのは、容易なことではありません。多くの人が言葉を濁し、口をつぐんでいます。そんな中で閻連科は齒に衣着せぬ発言で、常に物議を醸してきました。中国において間違っていることを「間違っている」というだけで、時として大変な反応を引き起こします。中でも日中関係において日本側の事情も汲み取り、中国人の行動を批判するような発言は、集中砲火を浴びること必至のタブーですが、閻連科はそこでもためらうことはありませんでした。

村上春樹が2012年9月に『朝日新聞』に寄せた東アジアの領土問題をめぐるエッセーへの返信として『AERA』2012年10月15日号に寄稿した「ひとつの文学が冷遇されるとき、国の面積など何の意味があるのか」では、尖閣諸島問題で悪化した日中関係を憂い、文学や民間交流までもが巻き込まれる領土権争いを批判し、「文化と文学は人類存在のもっとも深い部分の根であり、中でも、中日両国及び東アジアの人々が互いに愛しあうための重要な血管なのである」とびかけています。閻連科作品は『人民に奉仕する』(谷川毅・訳)『丁庄の夢』

（谷川毅・訳）、『四書』（2017年刊行予定？）はそれぞれ原書が発禁あるいは再販禁止となっています。『炸裂志』は刊行されましたが、メディアでの書評や宣伝は禁じられたそうです。日本では昨年2016年に、邦訳『父を想う』（飯塚容・訳）『年月日』（谷川毅・訳）『炸裂志』の3冊が刊行され、2度の来日を果たしています。そのときの様子は『東方』『すばる』『中央公論』『AERA』『早稲田文学』『北海道新聞』などにインタビュー記事などが掲載されています。昨年の滞在で閤連科はさらに日本びいきになったようです。「できることなら毎年でも来たい」と再来日にも前向きです。最新作は『日熄』で、台湾で先に刊行され、まだ大陸では出ていませんが、現在拙訳で邦訳を進めています。

最後に中国の文芸作品に対する検閲について少し。ノーベル文学賞作家の莫言、カフカ賞作家の閤連科も発禁処分を受けた経験があります。発禁、あるいは再販禁止になると、出版社が次の作品を出すのに二の足を踏む、あるいは内容に対する自主検閲が厳しくなり、作家の自由な創作の足かせになってしまいます。出版社は直接処分の対象となるため、非常に

慎重になります。禁止条項が明示、明文化されるより、どこまでが大丈夫でどこからがダメなのかということがわからないほうが、自主検閲、自己規制ではよりハードルが高くなるので、これは規制する側としては賢いやり方かもしれません。

また、これまで大陸で出版できないものも、香港の台湾の繁体字版、海外版で出版され、中国の人々も旅行やネット通販などで手に入れることができていました。大陸の簡体字版で削除、書き直しせざるを得なかった部分を、繁体字版では復活、加筆して出版するのです。しかし、2014年に習近平の招集で開催された文芸工作座談会では、文学、芸術への政府の積極的な関与が明確になりました。大陸の出版本の香港での出版にも圧力がかかるようになっていきます。中国の作家たちの立場も常にプレッシャーにさらされ、緊張感を強いられています。世界的に評価されて有名だからといって、決して自由ではありません。だからこそ、作家たちが必死になって伝えようとしていることを、中国の読者はしっかりと受け止め、共感するのです。今後の中国、ひいては日中関係を考える上で、そんな作家たちの思いに、中国の読者たちの共感に、わたしたち日本人も寄り添っていけ

たらと思います。中国人が膨大な数の日本の文学作品を読んで、さまざまな角度から日本への理解を深めているいま、わたしたち日本人も中国の小説の世界を知り、中国社会、中国人への理解を深める努力は続けていくべきではないでしょうか。翻訳という仕事がどこで誰かの、あるいはもしかしたら両国の関係にとつてごくぐくわずかでもいい方向へ向かうための力になっていると思えたら、それもまた幸せなことです。

（2017年1月26日・公開フォーラム）

講師略歴（いずみ きょうか）

東京都生まれ。1994年北京大学留学、博報堂北京事務所を経て、フリーランスに。約16年間北京で暮らす。2009年より朝日新聞GLOBE「世界の書店から」を連載中。大学非常勤講師。

訳書『水の彼方 Double Mono』（田原著、講談社）、『悲しみは逆流して河になる』（郭敬明著、講談社）、『兄弟』（余華著、文藝春秋）、『患患 日中の海を越えた愛』（文藝春秋）、『紫禁城の月』（共訳、メディア総合研究所）、『炸裂志』（河出書房新社）

読んでみました

『毛沢東の対日戦犯裁判』

中国共産党の思惑と1526名の日本人』

大澤武司 著（中公新書）

伊大知重男
（会員）

東京（極東）裁判やB・C級戦犯裁判に比して、研究が立ち遅れていた裁判の実態を、近年中国で公開された新資料に基づき、戦犯の処遇や帰国問題を含

めて明らかにした労作である。1950年ソ連に抑留されていた「満洲国」や関東軍の関係者（969名撫順組）が中国に送還された。又、終戦後中国に

残留し、内戦下で共産軍と戦って捕虜になっていた将兵などで戦犯とみなされた者（136名太原組）も抑留された。彼らに

戦犯管理所で5年間、中国共産党下の独特の3段階の思想改造が行われた。この「学習反省、認罪坦白、尋問調査」の3処置

は精査徹底を極めた、後、裁判判決となるが死刑判決は無く、東京裁判やB・C級裁判の判決に

比べ「極めて寛大」な内容であった。これ等の経緯、背景に中国側の1次資料を基に、この

裁判当時の中国内外の歴史的状況に切り込んだ力作である。戦犯としての扱いは、一般に

知られている「罪状認否、裁判判決、刑期服務、更正出所」の

過程を踏んでいるものの、その実は中国共産党下の管理所では、戦犯の顔から人間（人民）の表情への変革を求める処置、

即ち、学習反省、認罪坦白、尋問調査といった独特の思想改造法を徹底的に適用した。これに

より、管理所入所後、戦犯の中には捕虜か、戦犯か、といった疑問や、思想改造へ素朴な抵抗

等があったが、次第に心情に変化が生じ、ある者は「私は人間の皮をかぶった鬼」とまで自ら

皆の前で断罪したりした。中国政府が寛大に処置した結果、56年の裁判で大多数の戦犯

が起訴免除となった。が、考えてみれば過酷な犯罪の被害者である中国人にしてみれば殺され

た家族と同様の苦しみを味わせ死刑になることを望む者も多く

いたことは想像に難くない。これら復讐心「人民の義憤」に多くの人が燃えたであろう。これ

らの中国人民に対し、周恩来、廖承志（勿論、毛沢東、党中央

の指示もあり）両氏をTOPとする人たちが忍耐強く、広範に

組織的に「寛大」の処理方針を貫いたのである。この労力は、日本人戦犯への配慮、施策よりも何倍も多く、時間と苦勞を掛けたと思量する。

こうした寛大さは、一方で中国共産党指導部が、当時日本が日米同盟を強めていたことに對し、日本の親中国民間団体を通して、日中国交回復を念頭に「以民促官」を進めた対日戰略の一環であった。著者は中国の公開された外交文書を精査すること、で明解に記述している。

残念ながら毛沢東個人の考えや言動についての記述は少ないが、この「寛大」策の発想の根源は、毛沢東の大事に對する、彼特有の次局面に合理的な価値、解を求める「大意」、即ち、劇的な對抗的な政治判断が働いたものと見る。

帰国後の元戦犯の彼らは「中国帰還者連絡会」を結成し、反戦平和や日中友好を訴えている。だがその団体は日本政府の戦争への総括に踏み出せない姿勢に度々ぶつかり、時には内部

対立だけでなく、悲劇的な憤慨に堪えない（主に太原組）事象まで生み出し今日に至っていること、また、中国側の文革や改革開放の政治状況に翻弄され、内部分裂、敵対行動に至る様子を改めて、この書によって多く、深く知らされた。

歴史問題は今日も日中間の最大の懸案となっている。この1526名の告白や帰国後の行動は今でも大きな課題を含んでいる。戦後の総括は日中間、東アジアのテーマだけでなく、東京裁判、BC級裁判、更に欧州における敗戦国ドイツ戦犯への評

決を含めて、比較評価を深めることを感じさせる貴重な一冊である。特に、当協会の会員に、かの戦犯関係者がいることを考えると、当事者に寄り添って、もう一度、戦争の総括に身を置くこと、大切と思う次第。

出かけて
みました

〈戦争は人間を悪魔に変える〉検証の旅

渡邊澄子（会員）

2015年8月、本協会の企画に参加して中国東北部（旧満洲）を旅行した折、一番の目的

に言えば悲壮感に捉えられている。

だった七三一部隊跡の広大さには唖然とさせられたが、肝心の「罪証 陳列館」は改装のため入館禁止で、失望は大きかった。「戦争の出来る国」にひた走る近年の政情に危機感を募らせている私は、戦争の実態を知り、知らせねばならぬと大袈裟

博論を指導した留学生の中で最多だった韓国人の書く論文に頻出する「植民地時代」について、韓国人の身に寄り添って理解してはいなかったことに気付き、「植民地時代」を調べてみた。文学面からとりかかり、いきなり驚愕させられた。戦時下

の韓国で、唯一刊行を許可されていた文学雑誌は『国民文学』だけだった。「国民文学」の「国民」とは日本のことで、韓国を「朝鮮」と改名させ、韓国人を日本人に変える皇民化の徹底強制の凄まじさに、私は日本人として身をよじる罪悪感に苛まれた。父祖から受け継いだ姓名を日本名に変えさせ、徴兵制によって若者が日本兵として

「出征」し、さらに特攻隊員として死ぬことを榮譽と称えているが、その推進者が、学生時代に尊敬していた著名な学者たち、作家たち日本人だった。多くの日本人は私の周囲をはじめこの事実を知らない。この雑誌について「戦時下雑誌『国民文学』の位相」（大東文化大学紀要、1914（17）、（1）（4））として発表してきたが、その作業に平行して、戦争の主体者は男性だが、女性が積極的に援け励まし勇気付ける役割から主体者になっていく過程を「女性の戦争責任」問題として編集したりもしてきた。

中国東北部旅行は私にとって貴重な体験となった。あの草原の広大無辺さへの驚愕に「百聞は一見に如かず」の真実を教えられたことにもよる。皮相的検証になることを自覚しながら、それでも「戦争の悪」の検証作業になればと、2016年1月30日から2月4日にかけてアウシュビッツ・ビルケナウ強制収

容所に行ってきた。アウシュビッツは著名な『夜と霧』はじめ、幾冊かの本によってある程度は知っていたつもりだったが、その程度では無知にも等しいものだったことを思い知らされた。総称してアウシュビッツ強制収容所と呼ばれているが、実は、アウシュビッツ1号（収容者数は1万2000人）2万人、2号のビルケナウ収容所（最大収容所で9万人以上）、3号のモノビツェ収容所（1万1000人）の3か所と小さな約50か所の副収容所（その一つにハイデルベルク大学に客員教授として赴任していたとき行ったことを思いだした）から成り立っていたのだ。頭髮はじめ全身の毛を剃られて真裸にされ好色と残忍な眼に監視されながらシャワー室と言われてガス室に追い込まれる無数の女性たちを映像に残す残忍さも人間の側面なのだ。毛髪、ハイヒールや子ども用も多数混じる靴、眼鏡、ハンドバッグやスーツケース等の山、毛髪で織った布や服

や袋物等々、目を覆いたくなる部屋々を巡る私はその1つ1つに1人1人の人生を思い震えが止まらなかった。ビルケナウはアウシュビッツどころではなく巨大だった。木造の「囚人」棟は最後尾が見えぬ程続いている。ガイドが、ここは広大すぎるからここから眺めるだけで次ぎに行きますと言ったので、私はあわてて、こちらの方が規模が大きいのですからぜひ見たい、見させてくださいと、同行の方々の意志確認もせずに食いが下がった。私の執拗さに仕方なさそうに、それでは少しだけとほんの少しだけ内部に案内された。強烈な印象を受けたのはトイレだった、アウシュビッツでは冬期が思いやられる粗末な板張り部屋の真ん中に30センチ弱の穴のある板が1枚だけ前後左右何の仕切りもなく並んでいるだけで、壁には監視窓。男の目に監視され、他人の目にさらされて排便する恥辱は、人間の尊厳の放擲であろう。ここで私を用をたせるだろうか。できない

い。涙がこぼれた。だが、ビルケナウはさらに苛酷だった。20センチほどの間をおいて25センチほどの穴が開いているだけの板が仕切りなどなく3枚渡されていた。壁には監視窓。人間であることをやめなければ生きていけない場所なのだ。もう涙も出ない。毒ガス入りの空き缶、死体焼却所、花束の供えられた数千人が銃殺された「死の壁」に頭を深々と垂れる。捕らえられて囚人とされた人は当初は登録され写真も撮られているが、後には未登録で犠牲者名は不明なので確実な人数は掴めぬが、連行されたのは約130万人、殺害された人数は約110万人という。

私一個の執拗な要求で、不満の残る一部見学が見ることができたことを同行の方たちから感謝されたのはほっとした。七三一部隊との決定的な相違は犠牲者数を措くとして、アウシュビッツでは逃亡者がいたこと、所内にレジスタンス組織が

できたこと、ソ連軍による解放時に約7500人が残っていたこと、無数の写真によって「囚人」とされた人物の特定がかなりできたことだろう。戦争は人間を悪魔に変える現実をこの目で見たが、まだ見たと言いきれはしない。もう一度しっかり見てきたいと思っている。

ハルビン平房の七三一部隊の「罪証 陳列館」完成と知って個人旅行で行ったのは4月10日からの3泊4日だった。調査不足のこの旅はまるでガイドと運転手（空港で帰国間際に2人が夫婦と知った）のカモにされに行ったようなものとなった。旧満洲時代に日本の文学者が戦地慰問で出かけ、本国民衆の悲酸な生活実態とかけ離れた贅沢を享受した彼等が泊まった当時は最高級の大和ホテル（現在は「龍門貴賓楼酒店」で、欧米系のホテルが第1位になっている）に1泊しその後は同系列の一段格下に泊まったものの、大和ホテルはさすがに往年の贅を

偲ばせる建造だった。目的を何度も話したのに観光場所にはかかり連れて行かれて、彼等に贅沢をさせる役割を担わされてしまったが、兎も角陳列館（3度目くらいの改装らしい）は見た。約3000人が生体解剖の犠牲になっているというが、敗戦を察知した幹部は施設を爆破し、残っていた解剖験体用「マルタ」を虐殺して日本に逃げたので只の1人も生き証人が残されていないばかりか、解剖のメスを手にした張本人はアメリカにデータを渡すことで戦犯免責の取引をしているだけのみならず、持ち帰ったデータによって東京大学や慶應義塾大学から博士学位を得たり、大学教授職にいたり悠々の残余生涯を送っているのだ。アメリカはこの時のデータを使って朝鮮戦争他に役立てている。石井四郎から嚴重な口止めをされた下級軍人や軍属は厳しく辛い生活を強いられ、見聞したことを話したしたのは戦後大分経ってからで、逃げ遅れてソ連の捕虜とな

り、裁判によって実態のおぞましさを知ることができ、アメリカによる「フェル・ヒルリポート」がその裏付けとなるが、その残忍さをこの小さな枠内では伝えきれない。項を改めたい。凍傷実験の人形や、細菌増殖のための蚤や鼠の飼育などはリアルに再現されていて恐怖に震えるが、生き証人絶無は決定的陰路だろう。買い集めた20数冊（そんなにも出版されていたのだ）を読みこみながら怒りが噴き出し、言葉を失う。ビルケナウにはぜひもう一度行って来たい。紙幅の都合で結論的に言えば、戦争は人間を容易に悪魔に変えると断言できることだ。

私は10数年前から毎年、6月28日から7月1日にかけて秋田の大館で開催の戦争末期に花岡鉦山に連行された中国人惨殺の「花岡事件」慰霊祭に参加しているが、郡山の白坂に「アウシュビッツ歴史博物館」のあることを知って寄ってきた。どこで見たのか、ナチスに殺される

場面などを描いた子どもの絵の展示は衝撃的だった。これを描いた子どもたちは無事に生き残れたのだろうか、涙が溢れた。

その後、七三一部隊について「ABC企画」と言う組織があつて活動が続けていることを知り、小平の事務所に行き、種々の情報を得たのでさらに深く学びたい。危機感濃厚な現状の進行阻止に焦燥感の深まる昨今である。日本が植民地とした台湾に本協会企画の旅行に参加したことを付け加えて難駁な報告としたい。とりわけ七三一部隊について何ほど書けなかった憾みをはらすために、20数冊読了後、ビルケナウを再訪して論文にまとめるつもりである。



編・訳 上松玲子

社会福祉を担う人材不足

武漢市の民政局によれば2016年市のソーシャルワーカーは4372人、ソーシャルワーク機構は67か所で、受益者数はのべ180万人という。かれらは民生サービスや困難者の救済に貢献している。しかし、一方で専門のソーシャルワーカーが不足しているという。例えば薬物依存専門のソーシャルワーカーは3000人も不足しており、薬物依存、高齢者、障害者、この三部門の専門家は合せて80

00人も不足しているという。

ソーシャルワーカーの多くは85年以降または90年以降生まれの女性で、薬物依存者の援助には難しさがあると福祉団体の責任者は言う。また、在宅介護の高齢者が急増しており、多くの人材が必要とされている。

高い専門性が求められ、しかも人の心を読む能力が求められるソーシャルワーカーの収入は高くないが、卒業後志望する大學生は少なくないという。

『武漢晩報』2017年3月22日

失われる歌の世界

「燕を見たことがありますか」先生に質問されて16人の幼児たちはばかんとした。ではお家の人に見に連れて行ってもらってくださーい、と言ったものの、結局14人の親から見つからなかったという連絡があった。「ハンカチは何に使いますか」「ゲームに使います」「他には」20人の子どもたちは黙ってしまった。衛生上の観点からハンカチが使われなくなっている。燕もハンカチも有名

な児童唱歌に出てくる。幼稚園でこれらの歌を教えても、子どもたちがそれが何かを知らない現実、その歌で育った先生や親はとまどいを隠せない。「一銭硬貨を拾いました」という歌を子どもに歌ったら、「ママ、一銭硬貨ってどんなもの」と聞かれたという母親もいる。

これらの歌は時代遅れなのだろうか。ある幼稚園教諭は、情緒を育てるこれらの歌の詩の世界は重要だと答えた。またある専門家は、新しい良い歌を切望していると答えた。

『新華ネット』2017年3月30日

思い切った環境保護対策

洱海は雲南省で滇池に次いで2番目に大きい淡水湖で、雲南省大理白族自治州大理市にあり、形は人の耳に似ている。

3月31日午後自治州政府は正式に公告を發布し、厳しい環境保護政策がとうとう現実のものとなった。洱海周辺の保護区内や洱海に注ぐ河川流域の飲食店や民宿は4月1日より営業を休

止することになったのだ。235kmに及ぶ下水道と6つの污水处理場建設工事が終わる2018年6月までの措置だ。大理の観光客数は5年前の1545万人から2016年の3859万人に一気に増加した。これに下水道の整備が追いつかず汚水の回収処理率は低いまま。加えて農業廃水や生活排水の影響で湖に流れ込む河川の水質は年々悪化、国の調査によれば、2004年に比べて2016年の汚水量は50%以上増加しているという。気候条件によっては藻の大量発生リスクが高まり、1月には藻の発生で悪臭と魚の大量死があった。かつて1996年と2003年にも藻が大量発生して水質が悪化し、透明度が1m以下になったそう。

大理の民宿は2012年ごろまでは地元の人経営する1100軒ほどのみだったが、大理の知名度が上がるのに伴い、外地の人が民宿を開くようになり、毎年数百軒、数十億元の資本が湖周辺に流入した。2000軒

に膨れ上がった民宿の約半数が
工事期間休業の対象となるが、
当事者の経営者たちは比較的冷
静である。中には天津の家を売
り、2000万円を投じてこの地
で民宿を始めた者もいるが、も
ともこの地を愛し、美しい湖
あつての大理だという意識があ
るからだ。

〔重慶晨報〕2017年4月1日

遠くの墓参りを代行

武漢のとある墓地に電話をか
けてきたのは、北京に住む若い
母親。家出をして親不孝をした
母の墓参りをしたいが、仕事や
育児でどうにもならない、代わ
りに墓参りを頼みたいという。

「その際は少し悲しい顔をし
てもらえないだろうか。できれ
ば泣いてもらいたい」。4年間
墓参代行業務をしている柴さん
でも、こんな依頼を客から受け
たのは初めてだ。当日、実況動
画撮影がはじまる。墓掃除や、
花や果物を供えながら、柴さん
は悲しい出来事を思い出そうと
努めた。そして依頼人に託され

た言葉を墓前で述べているとき
は涙がにじみ出てきた。動画を
見た依頼人はいたく感激したそ
うだ。柴さんがこの仕事を始め
たころは、自ら墓参りに来ない
人たちに疑問を持っていたし、
自分自身も見ず知らずの人の墓
前にひざまずくことに抵抗を感
じた。しかし、だんだん来られ
ない依頼人の事情や辛さを理解
するようになり、1つ依頼を受け
るごとに徳を積んでいると感
じるようになったという。

2014年から始まったこの
サービスは、要望に応じて50
0元、800元、1600元の
コースがある。基本の500元
は清掃し、蠟燭をあげて紙銭を
燃やすこと。800元は基本に
加えて花や果物を供えるコース。
1600元はさらに墓碑に向かっ
て祭文を唱えるサービスが付く。
代理墓参は敬意を表し必ずひざ
まづいて行われる。また、依頼
人の要望に従い、その様子を映
した写真や動画を送るのだが、
近年ライブ動画の配信も行われ
ているという。

戸籍のなかった14歳

山西省の高校受験の願書締め
切りの4月1日のわずか1日前
に戸籍と身分証明書番号を手
にして、締め切りぎりぎりイン
ターネット願書を提出した女子
中学生がいる。臨汾市堯都区呉
村中学の李楠だ。彼女がそれま
で無戸籍だったのは彼女が捨て
子だったことに始まる。200
2年の冬、洪洞県の炭鉱夫、李
中金は雪の中赤子の泣き声を聞
いた。大きな木の下に毛布で包
まれた赤子。妻は反対したが、
孤児だった李金中は放っておけ
ず、夫婦はこの子を実子として
育てることにした。家は貧しか
つたが、女の子は李夫婦と兄の愛
を一身に受けて賢く明るい子に
育った。自分が実子でないこと
にも気が付いていた。

だが、李夫婦は戸籍の問題を
軽視していた。2014年に原
籍地の山東省に帰って李楠の戸
籍問題も解決しようとしたがで
きないままになっていた。中学

3年のとき銀行口座が開けず1
2500元の貧困手当がもらえな
かった。さらに今年になり学校
から知らせがきた。戸籍がなけ
れば高校受験ができない、成績
は問題ないのに惜しい、という。
夫婦は焦って仕事も放りだして
戸籍問題に取り組んだ。だが、
養子として申請しようにも李中
金はずでに実子があり、家も貧
しいので資格がない。李楠の独
立した戸籍を申請しようにも、
出生証明がない。公安から提示
された条件はどれも短時間で解
決できるようなものではなかつ
た。ついに臨汾市堯都区呉村鎮
の党委員会や政府、公安局の役
人たちも動いた。人道的な見地
からこの問題を処理するように
という指導者の指示を得た。3
月30日かつて李夫婦が住んでい
た村の幹部も加わって会議が開
かれ、方法が検討された。こう
して翌31日関係者全員の努力に
より、難関を越えた李楠は「期
待にこたえ、両親やみなさんに
恩返しをしたい」と語った。

〔山西晩報〕2017年4月6日

ようよう

陶々俳壇

兼題…「夏蜜柑」「花」「小」
席題…「水」

ランドセル歩く小さき入学児
雪柳闇夜に揺るる灯を点す
岡和水

一献の酒も早寝も春の風邪(特和水) 戸部まもる
「古老のいはく」で始まる農書水温む(特由紀子)

満開の枝垂れ桜や川覆ふ
春を呼ぶほのかな苦味蒔の臺
橋本紅杓

老いし今爪立てられず夏蜜柑(特紅杓) 佐藤若杉
九十路にも春の風吹く祝賀会(特南山) 〃
あたたかやドッジボールの児らの声(特まもる)

春の水筑波眩しく潤せり
家を毀つ手力男花の昼
長野宏太
〃 鈴木南山
☆花吹雪鯛焼佇ちて頬張れり

雪解水吊橋揺らす風を生み
啓蟄や昨日と違ふ石の位置(特宏太) 馬場由紀子
〃

☆最高点 ○由紀子選 (特)各人の特選

選後評

馬場由紀子

小さくも舌にビリッと山椒の芽 若杉

〈あわれはつひに山の子ほろ苦き「シドケ」のひたしに舌鼓打つ〉作者の歌である。作者の味覚は心から山の子。山菜の苦味が相当お好きなようだ。この時期、秋田には美味しい山の幸が溢れていることだろう。

むらさきとふ至福あるべし諸葛菜 宏太

この時期よく見かける花に諸葛菜がある。プランターや地植えのものをよく見かけるが、群れ咲きて揺れる様はまるで紫の風が吹いているようだ。春の訪れは私たちの身も心も温かくしてくれる。

大吉のみくじ孫持ち大試験 まもる

受験生のお孫さんがいらっしゃるようだ。自分の子どもの受験には、勉強をみてあげたり、受験校の選別など係わることが多かったが孫ともなると見守るしかない。それだけに神にお願いする思いは人一倍。

桜鯛鳴門港の小料理屋 紅杓

この時期の産卵直前の鯛を桜鯛という。見た目にも色鮮やかで味も良い。広く旅をされた作者は瀬戸の桜鯛も堪能されたようだ。瀬戸内の海と風と光が伝わってくる。

院生に小遣はづむ四月かな 南山

昨今の大学生は大変だ。学費の高さに親が四苦八苦しているのを目の当たりし、これ以上の負担をかけるのを遠慮してアルバイトに励む。日本の学費は世界でも高い方だぞうだ。おじいちゃん いばいお小遣をあげてください。

こんこんと富士の湧水鳥帰る 和水

富士の湧水地は山梨や静岡に多数存在する。地では透き通った水が砂をかき分けこんこんと湧き出ている。見上げると鳥が北にむかって飛んでいく。乾坤の狭間にある作者は雄大な自然に抱かれている。

一茶と流山

鈴木昭治郎

一茶〔宝暦13年(1763)→文政10年(1827)〕については、佐藤善一、岡和良、戸部守氏の素晴らしい随想が既にある。これに触発されて岩波文庫の丸山一彦校注、一茶七番日記を読み直してみた。一茶自筆の本書は文化7年(48歳)同15年(56歳)に至る9年間の句日記である。

ところで、この日記の文化9年(1812)10月の条に、十三晴昨日ノ泥衣洗双樹病。廿六晴千住ヨリ馬橋二入。廿七雨双樹没。廿九晴双樹葬とある。享年56歳。6歳年下の一茶は若い頃奉公していた馬橋の酒屋・俳人立砂(大川平右衛門)の紹介で双樹(五代目秋元三左衛門)と知り合ったよつで、立砂の死後双樹を度々訪れていた。双樹は離れ座敷を一茶に与えて家族同様に遇していた。ここ流山の一茶双樹記念館の中庭には、

夕月や流れ残りのきりぎりす 一茶

の句碑がある。また、双樹の菩提寺、流山光明院には双樹と一茶の連句碑が建っている。

豆引や跡は月夜に任す也 双樹
煙らぬ家もつそ寒くして 一茶

一茶は終生約2万句、連句250巻を作ったと云われている。菅見乍ら私が心惹かれた二句を記して戸部さんの云う「俳佛」一茶を偲びたい。

けふからは日本の雁ぞ葉に寝よ 文化9年8月
卯の花や神と乞食の中に咲く 文化11年夏

協会通信

◆第6回定時社員総会のお知らせ

来たる5月25日木曜日14時30分から、善隣協会5階会議室において、第6回定時社員総会を開催します。正会員の皆様、ぜひご参加ください。総会資料の発送は5月1日を予定しております。尚、総会終了後は懇親会を催しますので、こちらもご予約ください。会費はございません。

◆理事会における「本協会の将来像」に係る自由討議の現状報告！

3月号の『善隣』誌で、「本協会の将来像」について活発な自由討議が始まったことはお知らせしました。今回はその後の概況を手短に報告します。

先ず、本協会は設立（1941年）から数えて75年が経過したが、未だに「満洲」という衣

を捨てきれないでいる。もうそろそろ「満洲」を脱皮しないと若い会員が入ってこないのではないか？という議論がある。協会の歴史を振り返り、現在を見つめ将来に思いを馳せる時、この一事だけでも侃々諤々の議論に発展する。

また、それではこの協会の存在意義と新しい錦の御旗はどこに置くべきか？という議論についても、基本は定款に書いてある通り「中国及び東アジア」に重点を置いて国際的に善隣友好を推進すべきだという意見が出されるが、一方で必ずしもそれに拘らなくてもいいのではないかとという意見も出る。会員はもっと増やすべきだという意見が出されるが、必ずしも増やさなくて現状維持でもいいのではないかという意見も出される。

事程左様にこのようなテーマは一筋縄ではまとめきれないことは覚悟の上で討議が進められているのが現状であります。

理事たちも、これまでの人生は誠に多種多様なジャンルにま

たがっており、今回の討議を通じて全体像についての理解の揃いを克服するという意味においては無駄ではなかったと中間的総括をしています。今後については鋭意具体論に入るべく討議を進めてまいります。

（事務局・藤沼弘一）

同好会だより

〈一石会〉4月例会優勝

岡 和良氏

〈謡曲会〉

5月16日例会 実施予定曲目

曲目	役 割	地 頭
鶴 飼	シテ神保 ワキ鶴川	堀 野
天 鼓	シテ鶴川 ワキ神保	堀 野

〈お詫びと訂正〉

3月号の杉山秀子氏の旅行記の28ページ、キューバの国土面積「約1万922km²」は「約1万922km²」の誤りでした。

〈4月号の落丁〉

4月号11、12ページに落丁が発生しました。落丁がありましたら、再送いたします。

編集後記

▽黒いスーツ姿の新社会人が目立ちます。業界誌の就職人気企業ランキングによると、ANAとJALがワンツウです。それに続くのが食品や日用品で、産業構造の変化は認識していますが、かつての金融や重工業、人気のマスコミはどうしたのでしょうか。

▽ところで、仲間との酒飲み話で、孫の進路に話が及びました。論議の末、数学の素養が求められることは一致しましたが、どの産業が有望かはまとまりませんでした。誤解を恐れずにいえば、原子力と防衛産業ではないでしょうか？

▽表紙はかつてのオフィス日比谷公会堂（市政会館）を取り上げました。公会堂は、時代を反映する特異な地点に位置しています。数々の大事件、社会現象はここにいればいち早く感知できましたが、ここを離れてからは感覚が鈍くなりました。なに、年だろうって、それもありますか。（福島靖男）

2017年 5 月の行事予定

- 9 日（火） 謡曲会（松木先生稽古日） 14：00
- 10 日（水） 俳句会（吟行） 10：30 浜離宮庭園正門前集合
投句の場合は兼題「時鳥、草」及び当季雑詠
- 11 日（木） ○公開フォーラム 14：00
「福島原発・母性文化と平和について」
村田光平氏（元スイス大使）
- 12 日（金） 一石会囲碁例会 11：00
- 16 日（火） 謡曲会例会 14：00
- 18 日（木） 流れるような中国語の調べ『河殤』を聴いて楽しむ会 16：00
※参加ご希望の方は、事前に事務局までご連絡ください。
- 18 日（木） ◎公開アジア研究懇話会 18：30
「中国・中国人対象の半生涯、パラオから眺める日中韓」
田尻和宏氏（元パラオ大使・瀋陽総領事）
- 23 日（火） 謡曲会（松木先生稽古日） 14：00
- 25 日（木） 第 6 回定時社員総会 14：30（総会后、懇親会開催）

5 月 の 会 議 予 定

1 日（月）環境委員会	14：00	18 日（木）国際交流委員会	14：00
11 日（木）講演委員会	15：30	25 日（木）理事会(第 5 回)	14：00
〃 広報委員会	15：30	29 日（月）臨時理事会(第 6 回)	14：00
15 日（月）臨時理事会(第 4 回)	14：00		

※会員外一般聴講者の参加費は、◎印：1000円、○印：500円、無印：無料です。

※下線は通常日程に変更あり

